夢は二刀流の削蹄師

岩手県立農業大学校 畜産学科 肉畜経営科　1年　中野 寿美

さようなら、愛しきホルスタイン達よ。高校生活三年間、あなた達はいつでも私のそばにいてくれた。牛舎に入れば、まっすぐそのつぶらな瞳でこちらを見つめてくる。悩めるときは、傍らにもたれかかっても拒まず受け入れてくれた。暖かくて大きな体。力強い骨格の四肢に、ぴっちり皮が張っている。白と黒のコントラストを持つ彼女達は、ものを言わない。しかし、沢山のことを教えてくれた。都会に生まれ何も知らない私は、社会の仕組み、生物の営みについて、様々なことを彼女達から教わった。乳牛は、私の第二の母親だ。だが、そんな乳牛達に別れを告げなければならない。旅に出るからだ。

進学先は、岩手の農業大学校に決めた。勿論酪農を学びに行くためではない。私は、岩手に肉牛を学びにいくのだ。新たな地、新たな環境、新たな生活、新たな和牛達。全てが真新しく、全てにわくわくした。よし、これからの私は肉牛一色だ。何も知らない分、沢山の知識をつめこんで、肉牛に染まるのだ。そう意気込み、肉牛舎に向かったその途中で、目に入ったのは見慣れたモノクロの物体。あれ、そういえば、岩手県立農業大学校は畜産学科が二つある。ひとつは肉畜経営科。そしてもうひとつは酪農経営科だ。嗚呼、困ったなあ。肉牛舎の前には、立派に乳牛舎がそびえたっている。

乳牛もいるなんて。私はこれから肉牛について学ばなければならないのに。それはつまり、肉牛を極めるということだ。それなのに、乳牛がいるなんて。嬉しかった。心の中で、また会えたね、そうつぶやいた。しかし、それどころではない。このままでは、私は酪農に対しても肉畜に対しても中途半端な半端者なってしまう。常にどちらへとも心がふらつく。私の心境は複雑になり、葛藤にまみれた。不安だらけの胸中で、入学式へ足を運んだ。

その不安は、当の入学式中に消え去ることとなった。校長先生が壇上でこう言ったからである。「入学生の皆さんも、本県出身の大谷選手のような、世界で活躍できる、そんな社会人を目指して下さい」。その言葉で、はっとなった。大谷選手は投手と打者の両方を本格的に行う選手である。そう、「二刀流」だ。一つだけではなく、二つ。両方やる。両方目指す。いいかもしれない。酪農と肉畜、両方やろう。両方を目指そう。

あさましい考えだ。欲張りだ。無謀だ。まさしく、半端者に成り下がってしまうぞ。どこからかそんな声が聞こえてくる。一つ極めるのも一苦労な手前、二つもやるなんて。しかし、目指すことはできる。しかも、ここは絶好の環境なのだ。肉牛だけではなく、乳牛もいるのだ。やるぞ、「二兎を追い、二兎とも得る。」

両方やることは私の夢を叶えることでもある。私の夢は「畜産の理解者」になることだ。広い広い畜産の世界。知っても知っても底がない。その畜産の中で、酪農も肉畜も知る

ことができれば、両方の理解者になれる。私達の生活、地球を支えている畜産の。家畜を飼養し、食べ物を生産するのが畜産だ。人の口に入るものを作り出す誇り高き仕事。にもかかわらず、畜産は時に非難を浴び、常に問題を抱えて苦しみ喘ぎながら生きている。離農、高齢化、食糧自給率の低下、偏見、風評被害、挙げればきりがない。しかし、理解者になることでそれらの問題とその解決に向き合うことができる。畜産物を口にする限り、人は畜産の味方でいるべきなのだ。そのためには、畜産の理解者でいなくてはならない。酪農も、肉畜も両方理解することは、理解者になる小さな第一歩にすぎない。

私は非農家だ。そのうえ農業の後退した東京都の生まれ育ち。私にとって酪農はいつも外から見ていたものだった。当事者ではなかった。けれど、今は違う。三年間、そして現在進行形で酪農を学び、知識と経験を身につけてきた。ここまで来た。農家でなくても、農家の仕事を手伝える。畜産の仕事はできる。協力、支援ができる。

しかし、畜産業界の本場に飛び込んでからは挫折ばかりだった。同級生はほとんどが農家の後継者のため、非農家の自分にとっては級友がとても大きく見える。その大きさは、力の大きさでもあり、自分との距離の大きさでもある。できない自分とできる級友を常に比較し、劣等感や焦燥感に苛まれる。プレッシャーに押しつぶされそうになる。非農家の自分の無力さを思い知らされることばかりだ。それでもなお、この世界に足を踏み入れて良かったと感じる。一見ライバルに見える級友達は、味方でもあり、素晴らしい先生になってくれるからだ。困ったときは自然に助け合い、どうすればうまくいくかを指導してくれる。肌で感じてきた畜産の世界を語ってくれる。東京では、皆がまっさらな無知だったので、スタートラインは同じだった。だがここでは、出身も経験も、価値観も全てが違う。その分お互いの足りない所を補い合い、受け入れ合って暮らしている。現場経験や勘に乏しい私でも、三年間培った知識や構造について皆に説くことができた。先入観のない効率的な方法について、今畜産が抱える問題など、言葉で表し意見を交わすことができた。牛だけでなく、人にも恵まれていた。恵まれた人が、良い牛を作るのだと確信した。

岩手にきて二ヶ月の月日が経ち、私にはもう一つの夢ができた。それは削蹄師になること。削蹄師なら、肉も乳も垣根はない。思う通り、両方できる。肉畜も酪農も、どちらにも触れ合うことができる。そう考えると天職だと思った。今までは眺めるだけの削蹄も、ここに来てからは生徒で取り組む作業の一つとなる。初めての削蹄の講義。待ちに待った当日は、作業着に腕を通すのも楽しく感じられた。講義は二日間に分けて行われ、一日目はホルスタイン、二日目は和牛で行う。まずは足上げから。久しぶりに触れたホルスタインの四肢は懐かしかった。しかし、失敗の連続だった。かがんだ低い姿勢で、足を持ち上げつつ、牛にも人にも楽な姿勢を探らなければならない。一日目は足上げだけで精一杯だった。二日目は剪蹄鋏と蹄鑢を使うことができた。一日目より安定して足を持つことができ、蹄尖を

パチンと切ると、牛は心なしかすっきりしていたようだった。私まで同じ気持ちになった。

削蹄師さんから金言をいただいた。「最初は誰でも何もできない」。「でも、努力と根性があれば大抵のことはできる」。その後には、「頑張りなさい」と続いた。蹄は牛にとって第二の心臓。生きる要となる場所。つまり、削蹄によって家畜の命運を握ることとなる。私達に貴重な食料を提供してくれる家畜。その大切な蹄を切る削蹄師という仕事は簡単には目指せない。しかし、必要不可欠な仕事である。私は今まで、そして今後も得た酪農の知識を活用し、牛にも生産者にも寄り添うことのできる削蹄師を目指す。ただ切るのではなく、酪農産業の手助けになりたい。肉牛も乳牛も、両方の力になる。これから沢山の困難が待ち受けているだろう。それでも、ひたむきに向き合えば、牛達は応えてくれる。ホルスタインにまた出会えて本当に良かった。和牛の飼養当番が終わったら、今日もパーラーを見に行こう。まだまだ先は長い。その分沢山のことを学ばなければ。そして、いつかはなってみせる。二刀流の削蹄師に。